



斬新かつ先進的なBCP「米沢モデル」 官と民が互いに機能を峻別して補完 合築なれども両院の個性が強く発露

向かって右側が三友堂病院、1段低い中央の建物を挟んで左側が米沢市立病院



米沢市の公立と民営2病院は、病院が存続、成長していくための手段を考えていた。当局は「米沢市医療連携あり方検討委員会」を設立し、斬新な解答に至った。それぞれが機能を分担し連携するというものであり、そこには合築も含まれていた。この事例は「米沢モデル」として注目されているが、特に建築面から考察してみた。

選者／考察者 岩堀幸司（建築家）
写真／ロココプロデュース 林 広明

this month Architecture

米沢市立病院・一般財団法人三友堂病院

民・官を問わず、病院の赤字が連

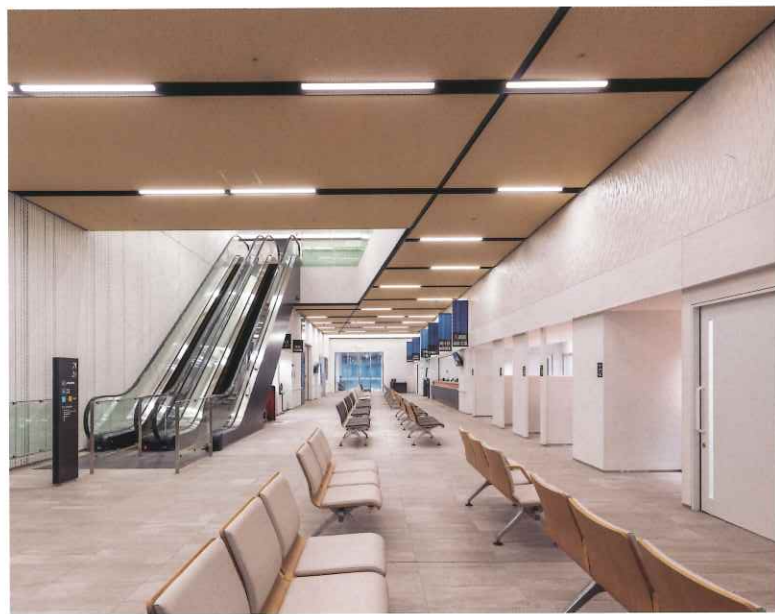
日報道されている。経営難に陥る病院が増える一方で、第一次医療法改正からちょうど40年が経過した。同改正の病床規制に伴う駆け込み増床やそれ以前のオイルショック期に建設された病院も40年を超えようとしているが、現在、工費は高騰し、必要な建て替えがままならない状況となっている。

そのような現況の下、山形県米沢市では、斬新かつ先進的な試みが成された。それが、公立の米沢市立病院（以下、市立病院）と民営の三友堂病院のコラボレーションである。いずれも築40年から50年の建物を抱え、新病院の建築に迫られていたのだが、米沢市がハブとなり、互いに知恵を出し合い、そして役割分担を定め、2023年11月、市立病院敷地内に2つの病院がアメニティセンター（共用部分）を挟み連結させて建築し、オープンに至ったのである。

オープンまでには、それぞれの病院の現状認識と工事費・法制度的なハードルなど様々乗り越える必要があったことは言うまでもない。ただ、電気・空調熱源などメインの設備施設、給食センターなどの共有は、建設費・維持費の軽減策としては大いに有効であった。特に民間病院にとっては、市有地の借用によって自前での土地取得の必要がなくなったメリットは大きかったはずだ。以下、それらメリットや解決してきた課題



三友堂病院 1階三友堂モール。壁面は米沢市立病院同様。採光に留意しており非常に明るいイメージだ



米沢市立病院 1階総合受付。伝統的の織物、自然景観をモチーフにしたデザインの凹凸のある壁面で表情を作る



三友堂病院からみた2階コモンストリート。廊下の向こうは米沢市立病院。床のタイルの色が異なる



米沢市立病院の2階コモンストリート。正面に見えるガラス扉から向こうは三友堂病院

も含めて紹介する。

保安上、両院の行き来を制限

何といっても最大の特徴は、公立の市立病院と民営の三友堂病院を、それぞれ「独立性を保ちつつ」同一敷地内に「合築」させたプロジェクトであることだ。民活事業採用+官民2病院の機能再編+隣接合築という日本初の官民連携事業であり、「米沢モデル」として広く知られるようになっていく。

敷地は、もともと市立病院があった南北に長い土地である。そのほぼ中央部、東西に伸びた、つまり病室を南北に向けた長方形の建屋が急性期の市立病院である。そして、アメニティセンター1名の共有エリアを挟んだ南側に、回復期を担うほぼ正方形の三友堂病院がある。配置図を参照して欲しい。これらが、無理なく一体的に繋がっていることに設計者の技を見る。なお、別棟として共通のエネルギースセンターがある。

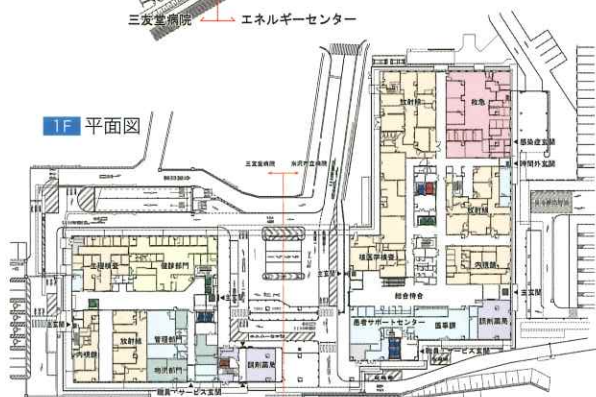
それぞれの階構成は、断面図に示す通りである。1階には、中央に東西に抜けた両院共通の車寄せと、それぞれの医事・受付、放射線等の検査機能があるが、他に市立病院側は救急対応機能、三友堂病院側は人間ドック機能があり、2施設の個性が見られる。2階は、市立病院側は化学療法、三友堂病院側は透析・患者支援という具合に、同じく役割に応



配置図

じた機能が配置されている。

特徴的なのは、両院共に1階及び3階から上層階では病院とアメニティセンターへの出入りにセキュリティ上、制限がかかっており、行き来が自由となっているのは、主に外来やコンビニ等がある2階のみである点だ。なお、市立病院から三友堂病院への転院患者も1日あたり2、3人いるというが、上記のことから正規の手続きを済ませない限り、「廊下伝いにそのまま」という訳にはいかないようになっていく。このけじめ



1F 平面図

4F 平面図



5F 平面図



2F 平面図



3F 平面図



こそ、「独立性」を育み、互いに切磋する原動力にもなっていると感じた。

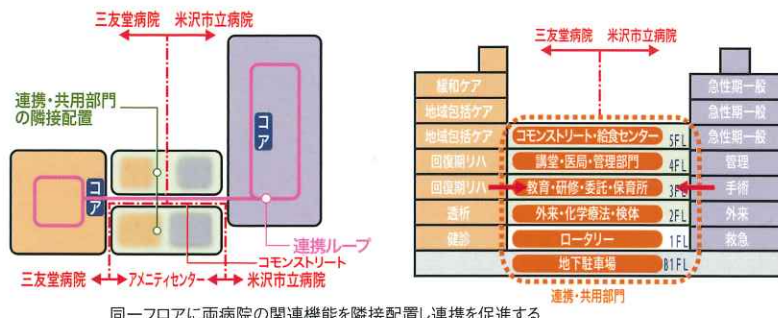
機能の分担と共有する機器・設備

2病院合築のために行われた共有、分担等について以下に記す。①厨房は三友堂病院側で給食センターを設置し両病院へ供給する、②中材部門はそれぞれで持つ、③講堂、研修施設等はアメニティセンターが管理・運営し両院は借用する、④救急対応、手術室、CT・MRI等の放射線関連装置などは全て市立病院側が対応する、(共同利用機器扱いとし、三友堂病院側では利用料を払う)、⑤リハは急性期リハと回復期リハで性格が異なるのでそれぞれにリハ部門を持つ、である。

共通する部分と分ける部分の建築的な仕分けが大変だったというが、同様に我が国でも前例がないということから、医療法を含めて法律上クリアするのに苦労したという。そのために保健所から職員が都度打合わせに参加し、その場で厚生労働省に確認しながら進めたという。

機能に沿った作り込み

市立病院は、急性期病院故に、救急、外来診察と画像含めた検査機能、手術・ICU/HCUなどを見事に連携配置して効率化を実現している。一方、三友堂病院は、入院患者の七



見守りを重視した米沢市立病院の病棟スタッフステーション。床のランダム貼りはリハの歩行距離認識のためのもの



三友堂病院健康管理センター待合。家具や什器等で病院らしさを払拭している



米沢市立病院病棟スタッフベース。フロア中央にあり、スタッフのリフレッシュや多職種間交流を目指す



三友堂病院最上階にある緩和ケア病棟レクリエーションルーム。ホテル然とした雰囲気印象的

超高齢社会、人口減少、医療リソー

※

割は75歳以上の高齢者故に、高齢者特有の視聴覚機能低下やせん妄などへの対応に配慮し、患者の安全やスタッフの動線に考慮している。特に病棟では、リハビリテーションラック(回遊廊下)を整備したり、アイトスポットやベンチを設け、歩行目標や休憩の場としている。なお、四角形病棟もスタッフ動線、患者の見守り、出入りチェックへの配慮からの形と言える。

最後に、両院の現在の実績を紹介しておく。2023年開院から約2年を経過した今、市立病院の在院日数10・1日、病床稼働率89%、三友病院は在院日数34日、病床稼働率99%、緩和ケア病棟は90/100%の稼働率である。まさに、このプロジェクトは、大成功であったということだ。全国に「米沢モデル」が広がっていくことを望みたい。

米沢市立病院／一般財団法人 三友堂病院

所在地：山形県米沢市相生町6-36、福田町2-1-55
病床数：市立病院＝263床(高度急性期18/急性期245)
三友堂病院＝199床(回復期177/慢性期22)

【建築概要】

延床面積：44,848.22㎡
構造階数：RC造+梁鉄骨造・一部梁端部RC造+中央鉄骨造(免震構造)
工事期間：2021年6月～2024年11月
(開院 2023年11月1日)
設計：内藤建築事務所・フジター級建築士事務所
施工：フジタ・後藤組・中村建設特定建設工事共同企業体